

思いやりの心が育つための援助
—身近な小動物とのかかわりを通して—

浦添市立牧港幼稚園教諭

名 嘉 房 枝

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究の目標	1
III	研究の仮説	2
IV	研究の内容	2
1	思いやりのある子の姿	2
2	身近な小動物とのかかわりで育つ心	2
3	思いやりの心が育つ過程	3
4	体験や感動を伝え合い、共感し合うための援助	4
V	研究の実際	5
1	小動物とのかかわりに関する実態調査	5
2	飼育年間指導計画	6
3	これまでの小動物とのかかわり	9
4	保育実践	10
(1)	主 題	10
(2)	目 標	10
(3)	設定理由	10
(4)	実践1「大きな絵本を作ろう！」	10
(5)	実践2「ふれあい広場で遊ぼう！」	15
VI	研究の成果と今後の課題	20
1	研究の成果	20
2	今後の課題	20
	おわりに	20
	参考文献	20

思いやりの心が育つための援助

— 身近な小動物とのかかわりを通して —

【要 約】

この研究は、身近な小動物とのかかわりを通して、思いやりの心が育つための援助を工夫しようとするものである。

思いやりの心が育つ過程をとらえ、一人一人の育ちを受け止め、身近な小動物との体験や感動を友達や教師と伝え合い、共感し合うための援助を通して、思いやりの心を育ててきた。

その結果、小動物とのかかわりが豊かになり、命あるものを大切にしようとする思いやりの心の育ちが見られるようになった。

キーワード

幼稚園教育 思いやりの心が育つ過程 飼育年間指導計画

I テーマ設定の理由

幼児期は人間形成のうえで大切な時期であり、情緒の発達は特に著しいものがある。幼児にとって思いやりの心は、まだ未分化ではあるが、これから人間として生きていくために、ぜひ育てほしい心情のひとつである。

幼児は本来、身近な小動物に興味・関心があり喜んでそれらにかかわっていく。

「ウサギさん、お腹すいているんだね。たくさん食べてね。」と話かけながら餌を与えている子。

「ひよこを抱っこしたいんだけど、僕、我慢しているんだよ。」と生まれたばかりのひよこを、じっと見守る子。

「セミをいっぱい捕ったけど、仲間の所に逃がしたよ。ありがとうって言ってたよ。」と満足顔の子。幼児は小動物とのかかわりを通して、小動物の身になって考えたり、感じたりするようになる。思いやりの心は、望ましい人間関係の中でも培われることは言うまでもないが、このような幼児の姿から、小動物とのかかわりを通して育つ部分も大きいと考える。

そこで、どの子にも小動物に親しみを持ち、その子なりにかかわってほしいと願い、小動物と触れ合って遊べる環境を整えてきた。子供たちは、「幼稚園は動物園みたいだ。」と喜んで小動物とのかかわって遊んでいる。

しかし、そのかかわり方を見ると、ウサギを赤ちゃ

んをあやすように抱いている子もいるが、おもちゃのように扱う子もいる。また、小動物に対する認識も異なり、それぞれの小動物の習性や特徴が分かり、それに添ったかかわり方をする子もいるが、無理に自分の思い通りにしようと、小動物の命が損なわれかねないようなかかわりをする子もいる。

このように、小動物とのかかわり方は一人一人異なり、そこで経験する事や感動もさまざまである事が予想される。

そのような幼児に対して

- ・一人一人の思いに心を添わしていただろうか。
- ・心が育つような援助をしていただろうか。
- ・小動物と互いに気持ち良く生きるために必要な事を伝えたり、気づかせたりしていただろうか。

そこで、このような反省を踏まえ、教師が小動物に対する一人一人の育ちを受け止め、体験や感動を伝え合い、共感し合うための援助をすることによって、動物だけでなく、友達や教師の思いにも気づき、回りの命あるものを大切にしようとする思いやりの心が育つものと考え、本テーマを設定した。

II 研究の目標

身近な小動物とのかかわりを通して、思いやりの心が育つための援助を工夫する。

Ⅲ 研究の仮説

- 1 小動物とのかかわりで得た体験や感動を、友達や教師と伝え合い、共感し合うことで小動物とのかかわりが豊かになり、命あるものを大切にしようとする思いやりの心が育つであろう。
- 2 思いやりの心が育つ過程をとらえ、幼児一人一人の育ちを受け止めることができれば、思いやりの心が育つための援助ができるであろう。

Ⅲ 研究の内容

- 1 思いやりのある子の姿
思いやりのある子の姿を次のようにとらえた。

- ・ 気持ちが安定している子ども
- ・ 友達と仲良くできる子ども
- ・ 自分との違いを認める子ども
- ・ 相手を尊重する子ども
- ・ 感動する子ども
- ・ 命あるものを大切にしている子ども

「思いやり」とは回りの人の身になって、その気持ちをおしはかり、共に感じることである。

しかし、幼児は自分が思ったことは、相手も同じように思っているをとらえる傾向が強く、自分の持ちを相手にぶつけたり、押し付けたりして行動しがちである。

そのような幼児が環境と積極的にかかわり、直接体験を積み重ね、回りの人や動植物との心の触れ合いを通して、自分より小さい者の存在や弱い者をいたわる心、相手に共感する心、命を大切にしている心が養われ、思いやりのある子どもに育っていくものと考えられる。

- 2 身近な小動物とのかかわりで育つ心

幼児は近所の公園や草むら、幼稚園の園庭や飼育小屋などでいろいろな小動物に出会う。セミにおしっこをかけられたり、バッタを虫カゴのいっぱい捕まえたり、また、ウサギやチャボを抱いたりする体験を通して、身近な小動物に

関心を持ち、親しみを感じるようになる。

生活の中で自然な形で幼児が触れることができ、自由にかかわったり、世話をしたりすることができる環境にあるとき、小動物が身近に感じられる。

幼稚園の自然環境の中で、幼児が小動物とかかわることによって次の事が育ってくる。

- ① 小動物と親しむことで、不安な気持ちがやわらぎ、情緒が安定する。
- ② 餌をあげたり、抱いたりすることで、愛情を持つ。
- ③ 継続して見る事によって、小動物への認識や生態上の知恵が深まる。
- ④ 小動物の誕生や死から、命の大切さを知る。
- ⑤ 小動物に応じた世話ができるようになる。
- ⑥ 小動物の親が、子を守り育てることに気づく。
- ⑦ 友達や教師のかかわりを見て、興味や関心を持つ。
- ⑧ 友達と一緒に世話をすることで、責任感や連帯感が生まれる。
- ⑨ 友達や教師と体験や感動を共感しあうことができる。

以上のことから幼児期にできるだけ豊かな自然環境の中で、小動物とかかわる体験を積み重ねることは、小動物の身になって、その気持ちをおしはかたり、命を守り育てたりする『思いやりの心』が育つことにつながっていくと考えられる。

3 思いやりの心が育つ過程

思いやりの心の発達には直線を描くようにスムーズではなく、その時の状況によって左右されるものである。また、その発達の過程も一人一人異なっていると考える。しかし、発達の過程をとらえていくことが幼児の育ちを受け止め、思いやりの心を育てるための教師の援助へとつながっていくものと考え、次のようにとらえた。

その際の視点として

- ・ 幼児のこれまでの経験によって、小動物への関心の示し方は一定ではない。
- ・ 小動物をじっと見る、友達のかかわりを見るなども、その子なりの関心ととらえる。
- ・ 乱暴と思える行動も発達の筋道である。
- ・ 間接経験も直接経験をより深めて行くものととらえる。

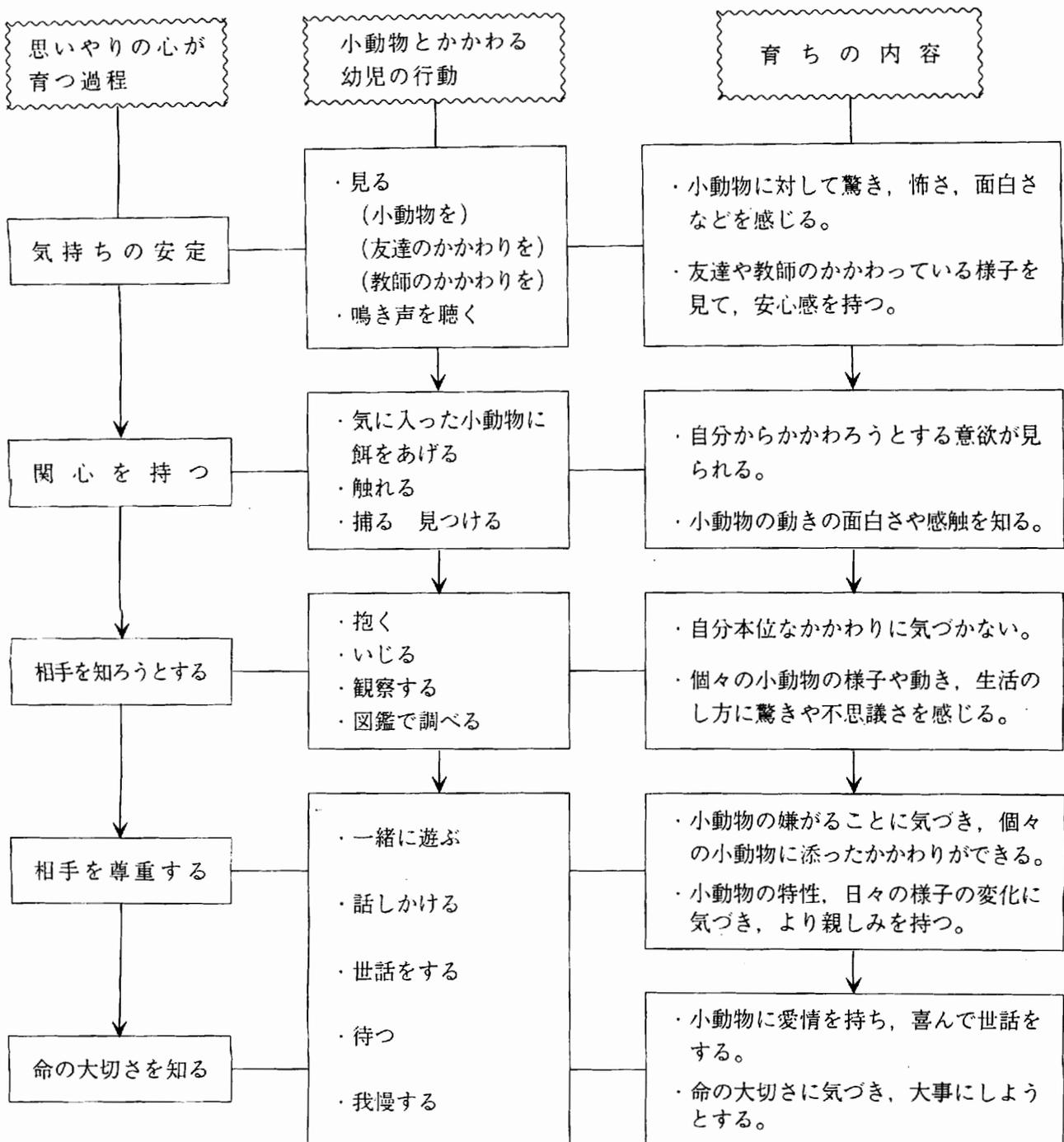


図1 思いやりの心が育つ過程

4 体験や感動を伝え合い、共感し合うための援助

幼児は体験した事や感動を回りの人に伝える事によって、伝えたい事を整理する。そして、そのときの感情の高まりを改めて思い起こすことで自分の気持ちを味わう。小動物との体験や感動は友達や教師と共感し合うことで倍増される。また、友達からの刺激によって、小動物への興味・関心が高まりより一層、直接体験を深め、広げていくきっかけとなる。

このような伝え合いや共感し合うことの繰り返しの中でしだいに回りの人や小動物に対して共に生きる仲間としてのかかわりに気づき、相手への思いやりの心が育まれていくものとする。その過程をまとめると図2のようになる。

その際の教師の援助として、次のようなことが考えられる。

- ・小動物に対する感じ方や受け取り方は一人一人違う。幼児のありのままの姿を共感的に受け止める
- ・教師自身が小動物に対して愛情を持ったり、世話をする姿を見せたりしながら、気づきや感動を積極的に伝えていく。
- ・友達同士互いに刺激し合い、より豊かな小動物とのかかわりができるように友達のかかわり方や気づきを伝え、興味・関心を一層深めて行く。
- ・小動物とかかわる中で起こる様々な体験や感動を幼児と共に共感しつつ、小動物の気持ちになって考えられるように方向づけていく。
- ・ひとつの気づきを全体に広げ、学級全体で感動体験を味わう場を作っていく。

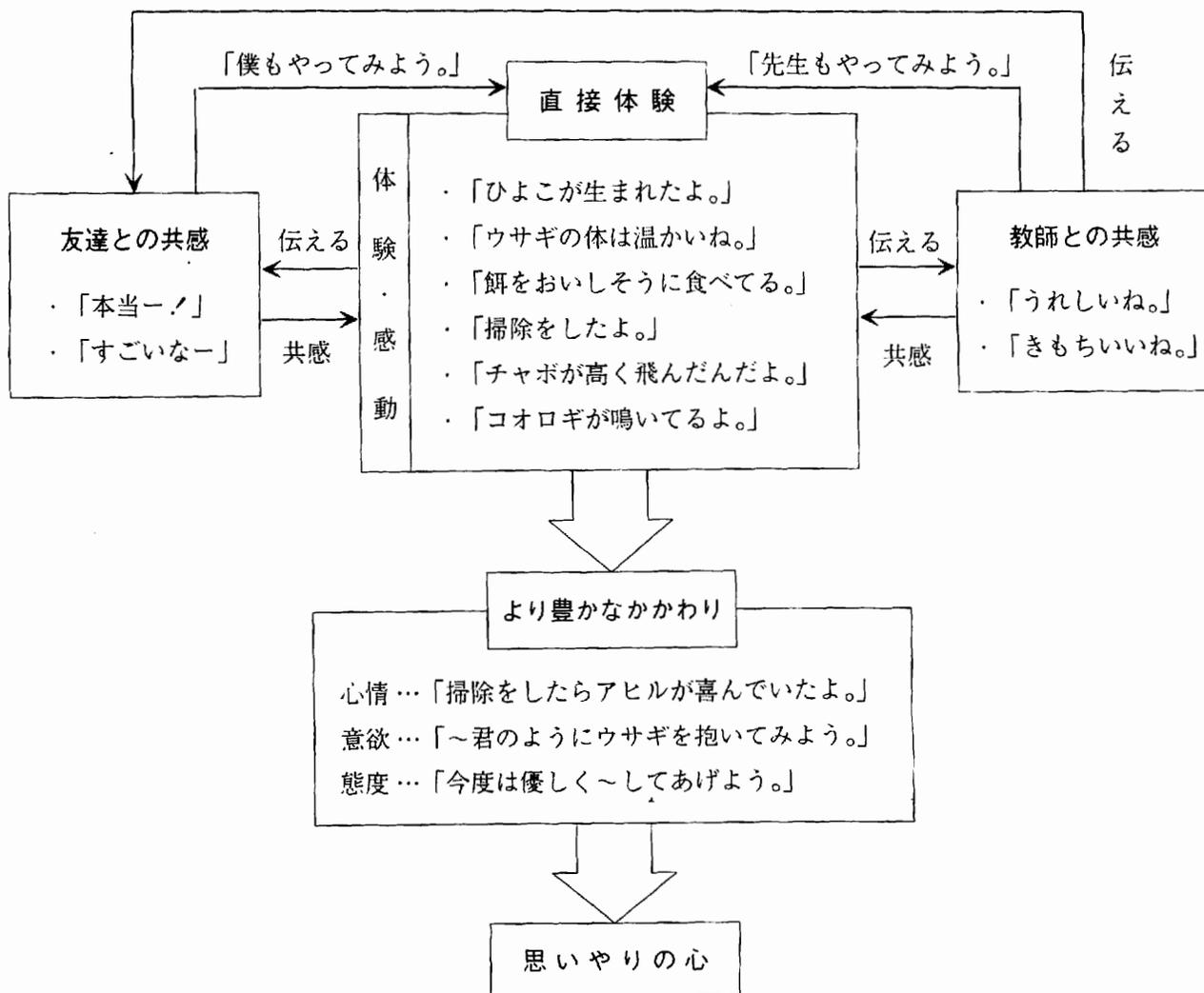


図2 体験や感動を伝え合い、共感し合う過程

V 研究の実際

1 小動物とのかかわりに関する実態調査

この調査は家庭における、小動物とのかかわりや保護者の願いを調査し、実態をとらえることで幼児一人一人を理解し、適切な援助をして行くための基礎資料とするために実施した。

- (1) 調査方法：アンケート方式（保護者記入）
- (2) 調査対象：5歳児 あさがお組 30人
- (3) 調査期間：平成8年5月24日～6月1日
- (4) 調査結果

質問① お子さんは、小動物が好きですか。(人)

項目	好き	嫌い	どちらでもない
男児	18	0	0
女児	10	0	2

質問② 小動物を飼っていますか。(人)

項目	飼っている	以前に飼っていた	飼ったことがない
人数	11	7	12

質問③ 小動物を飼っている家では、何を飼っていますか。(複数回答) (人)

種類	犬	小鳥	カメ	猫	鶏	金魚	リス	ハムスター	その他
人数	6	4	3	2	1	1	0	0	0

質問④ 小動物を飼っている家では、お子さんはどのようにかかわっていますか。(複数回答)

かかわり方	人数
餌をやっている	10
触れ合って遊んでいる	7
掃除や世話をする	1
関心がない	0

質問⑤ 小動物を飼ってない理由は何ですか。

(現在飼ってない19人に対して複数回答)

小動物を飼えない理由	人数
住宅事情	12
世話ができないから	6
家族にアレルギーの人がいる	3
本人にアレルギーがある	1
赤ちゃんがいる	1
本人が嫌いだから	0
家族の人が嫌いだから	0

質問⑥ 御意見や御要望を記入してください。

(主な意見・要望)

- ・家で飼いたくても飼えないので、とてもいいことだと思っています。楽しみに園に行ってくれるので助かっています。
- ・園で小動物を飼っているせいか、この頃はよく猫や犬を飼いたがります。「今はアパートだから家を建ててからね。」と言っています。
- ・小動物とお話しのできる、優しい子どもでいてほしいです。
- ・小動物の毛で喘息の発作を起こす可能性もあります。遊んだ後は手足を洗って、衣服についた毛をはたいて、着替えをお願いします。
- ・以前に、犬に噛み付かれたことがあるため、動物に対して少し恐怖感があるみたいです。

(5) 実態調査の考察

- ・現在、家庭で犬・小鳥・カメ・猫などの小動物を飼っている子は11人である。餌を与えたり、一緒に遊んだりしてよくかかわっていることが分かった。
- ・ほとんどの子が小動物を好きと答えているが住宅事情のために飼えない家庭が多く、園での小動物との触れ合いに期待している事が分かった。
- ・一人一人の経験の把握を通して衛生面の指導など個に応じた配慮の必要性が分かった。
- ・身近に小動物とかかわることのできない子が多い。園での直接体験を通して、小動物に対する親しみや愛情が育つよう環境を整え援助していきたい。

2 飼育年間指導計画（身近な小動物とのかかわりに関して）

小動物とのかかわりに関する家庭の実態や幼稚園の自然環境及び幼児の実態を考慮し、年間指導計画を作成した。

期	I 期（4月～5月）	
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物は好きだが、家庭で飼えない子が多く、幼稚園でかかわれる事に期待している。 ・小動物に餌を与えることで安定する子もいる。 ・親しみを持っている小動物に名前をつけたり、触ったりする。 ・ダンゴムシやカバマダラの幼虫を見つけたり、捕まえたりする。 ・水換えや飼育小屋の清掃をしている教師の手伝いをやりたがる子がいる。 	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物を見たり、触れたりして親しみを持つ。 	
園の自然環境（小動物）	室内	<ul style="list-style-type: none"> カメ（触る・遊ぶ・餌を与える） 金魚（見る・餌を与える） グッピー（見る・餌を与える）
	飼育小屋	<ul style="list-style-type: none"> ウサギ（触れる・餌を与える） チャボ（触れる・餌を与える・卵を温めている様子を見る） ヒヨコ（見る・触れる・成長に気づく） アヒル（餌を与える・動作を見る）
	園庭	<ul style="list-style-type: none"> カバマダラ・ツマグロヒョウモン（卵や幼虫を見つける・卵→幼虫→サナギ→成虫の変化を見る） ダンゴムシ（見つける・動きを見る・動きをまねる） ミミズ（見つける・動きを見る・長さを比べる）
環境構成のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫が好む野菜（カラシナ・キャベツ）は全部は収穫せずに残しておく。 ・カバマダラやツマグロヒョウモンが育つように、食草となるトウワタやパンジーを栽培しておく。 ・幼虫の動きのおもしろさや変化などに気づくように、観察しやすい容器を準備し、目につく場所に置く。 ・飼育小屋の掃除がしやすいように用具（ほうき・ちり取り・デッキブラシ・ホース）をそろえる。 ・小動物の名称や、どのような餌を与えるかなど、分かりやすいように表示しておく。 	
教師の援助のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・パンジーやトウワタの葉のうらに「何かついてるよ。」と声をかけ、卵に気づかせる。 ・卵、幼虫、サナギ、成虫に変化する様子に関心を持たせるように声をかける。 ・友達や教師が小動物とかかわっている様子を見せることで安心感を持たせたり、触って見たいという意欲を持たせていく。 ・飼育小屋の掃除は教師が中心になり、やりたい子に手伝ってもらう。 	
安全指導	<ul style="list-style-type: none"> ・水道に薬用セッケンやツメブラシを用意し、小動物とかかわった後は、手を洗う習慣をつける。 ・室内の小動物の水換えは、手を洗う場所が不潔にならないようにできるだけ外の水道を使う。 ・ハブが活動期に入る時期であることやその危険性を知らせる。 	

期	Ⅱ 期 (6月～7月)	
幼 児 の 姿	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギやチャボを触ったり、抱いたりして遊ぶ。むりやり自分の思いどおりにしようと乱暴にかかわる子もいる。 ・オタマジャクシやカタツムリを捕ることを楽しんでいる。その動きや変化する様子に関心を持つ。 ・セミ捕りに夢中になり、その種類を図鑑で調べたり、虫かごを作ったりする。 ・園庭で見つけた虫を、家に持って帰りたいがる。 ・室内で飼育しているカメやグッピーの水換えや餌やりをやりたがる。 ・小動物の好む餌が分かるようになり、家庭からキャベツやニンジンなどを持ってきて与える。 	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物に関心を持ち、驚き、喜び、疑問を感じる。 	
園の自然環境 (小動物)	室内	<ul style="list-style-type: none"> ・カメ(触れる・遊ぶ・餌を与える・水を換える) ・金魚(見る・餌を与える) ・グッピー(見る・餌を与える・水を換える) ・ザリガニ(見る・つかむ・餌を与える・脱皮を見る・水を換える)
	飼育小屋 園庭	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギ(触れる・餌を与える・抱く) ・チャボ(触れる・餌を与える・抱く) ・ヒヨコ(触れる・餌を与える・抱く・成長変化に気づく) ・アヒル(餌を与える・動作を見る・水を換える) ・テントウ虫・カナブン(捕る・観察する・放す) ・カタツムリ(見つける・餌を与える・動きを見る) ・オタマジャクシ(捕る・餌を与える・変化を見る) → カエル(捕る・動きを見る・放す) ・セミ(捕る・観察する・殻を集める・幼虫を見つめる・放す)
環境構成のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・オタマジャクシが育つように池の水を子どもと一緒に補充していく。 ・オタマジャクシを捕るためにプリンのカップや牛乳パックが使えるように準備しておく。 ・セミを入れるための虫かごを、自分達で作れるようにペットボトルや空き容器を目につく場所に置く。 ・カタツムリやオタマジャクシを飼育する際はできるだけ、見つけた場所に近い環境を子どもと一緒に考え作っていく。 	
教師の援助のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問や関心を持った事を友達同士で教え合ったり、図鑑を調べたりしている姿を見守ったり、教師も一緒に考えたりしていく。 ・餌を与えないと死んでしまう事に気づかせながら、セミやカエルなどはできるだけ元の場所に返すようにする。 ・教師が飼育小屋の掃除をしているのを手伝うように仕向けながら、当番活動の素地にしていく。 	
安全指導	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物を抱いた後、衣服についた動物の毛を払ったり、着替えたりして清潔にする。 ・寄生虫の感染の恐れのあるアフリカマイマイを手で触れたり、いじったりしないように注意する。 ・セミを捕るために、危険な木や塀に登らないように注意を促す。 	

期	Ⅲ期（9月～10月）	Ⅳ期（11月～12月）	Ⅴ期（1月～3月）
幼 児 の 姿	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手な小動物にも触ったり、抱いたりしようと挑戦する子が多くなる。 ・園庭で見つけたコオロギやバッタを飼育したが餌をあげたり、土を湿らせたりして世話をする。 ・ひよこの成長や虫の脱皮などの変化に気づき、友達に伝えたり、図鑑で調べたりする。 ・小動物の絵を描いたり、動きを体で表現して楽しんでいる子がいる。 ・グループで飼育小屋の掃除当番をやるようになる。張り切ってやる子もいるが、中には抵抗を示す子もいる。 		
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物の特徴や成長に気づき、関心を持ってかかわる。 ・小動物を大切に、世話をしたりいたわったりする気持ちを持つ。 		
園 の 自 然 環 境 (小 動 物)	室 内	<ul style="list-style-type: none"> ・カメ（触れる・遊ぶ・餌を与える・水を換える） ・金魚（見る・餌を与える） ・グッピー（見る・餌を与える・水を換える） 	
	飼 育 小 屋 園 庭	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギ（触れる・餌を与える・抱く・遊ぶ） ・チャボ（触れる・餌を与える・抱く・遊ぶ） ・アヒル（餌を与える・動作を見る・水を換える） ・トンボ（捕る・観察する・放す） ・ヤゴ（見つける・観察する） ・コオロギ（鳴き声を聴く・餌を与える・観察する・幼虫を見る） ・バッタ（捕る・観察する・放す） ・カバマダラ（見つける・観察する・放す） 	
環 境 構 成 の ポ イ ン ト	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭の雑草は、虫取りができるように一部を残しておく。 ・虫を調べたり、観察したりできるように図鑑や虫メガネなどを、目につきやすいように置く。 ・小動物を描いた子どもの絵や小動物にかかわっている子どもの写真などを掲示し、友達のかかわり方に関心を持たせていく。 ・コオロギの飼育ができるように必要なもの（まな板・ナイフ・霧吹き）を準備しておく ・掃除の仕方を確認し、分かりやすいように掲示しておく。 		
教 師 の 援 助 の ポ イ ン ト	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの小動物にふさわしいかわりができるように、友達のやさしいかわりを広げていくようにする。 ・トンボやバッタなどを捕って遊んだ後は、放してあげようという気持ちを持つようにする。 ・寒い地方では、冬眠する動物がいることを知らせる。 ・飼育当番の必要性が分かり、充実感が持てるようにしていく。 		
安 全 指 導	<ul style="list-style-type: none"> ・10月頃はハブにとって好適な気温になり、活発に活動する時期なので、その習性について確認し、注意を促す。 ・小動物とかかわった後に手を洗うことの必要性を再確認していく。 		

3 これまでの小動物とのかかわり

これまでに、幼稚園の自然環境の中で下記のような小動物とかかわり、生命の誕生・死・成長変化など、様々な体験を重ね感動を味わってきた。

月	幼 児 の 姿	教 師 の 援 助
4 月 ・ 5 月	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物を怖がっている子もいるが、餌を与えて喜んでいる子が多い。 ・ウサギ を水に入れたり、乱暴に扱っている子もいる。 ・カバマダラ の幼虫が蝶になって、飛び立つ様子に感動する。 ・ヒヨコ が誕生し、その成長を楽しみにしている。 ・カメ に「ゴンベエ」という名前をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギをお風呂に入れて、きれいにしたかったと言う子どもの気持ちを受け止めながら、動物と人間の違いに気づかせていく。 ・ヒヨコの誕生やカバマダラの成長を共に喜び合う。 ・飼育動物の世話は、教師が中心になってやる。
6 月 ・ 7 月	 <ul style="list-style-type: none"> ・チャボ を高い場所から飛ばしたり、ウサギ の体を観察したりと小動物の様子や動きに関心を持ち、確かめようとする。 ・オタマジャクシ の成長やセミの種類などに関心を持ち、図鑑を調べたり、比べたりしている。 ・セミ のいる場所や捕り方を、友達同士で教え合っている。 ・セミを捕ることを楽しんでいる。捕った後、虫カゴの中に入れっぱなしの子もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達がかかわっている様子や教師が丁寧に扱っている姿を見せたりしながら、自分達と同じように生きている事を感じとらせていく。 ・教師も子どもと共に虫捕りを楽しんだり、図鑑を調べたりする。
9 月 ・ 10 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギ やチャボ を抱けるようになったと得意になっている子が多くなる。 ・園庭で見つけたバッタ やコオロギ を教室で飼育し、観察したり、絵に描いたり、体で表現したりする。 ・グッピー をもってきてきたが、翌日に死んでしまい飼育の難しさを知る。次に飼ったときは、特に関心を持って様子を見ていた。 ・当番で飼育小屋の掃除をやるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小動物を絵に描いたり、体で表現している子を認め、友達にも知らせて行く。 ・グッピーの死について、その原因を子どもと共に考えていく。 ・掃除の際に足に糞や汚れた水がかからないように、長靴を準備する。
11 月 ・ 12 月	 <ul style="list-style-type: none"> ・「お掃除したらアヒル さんが喜んでい」とうれしそうに伝える子がいる。 ・飼育当番の仕事の手順を覚え、自主的に世話をしている子もいるが、中には「汚い」といって抵抗を示す子もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの気持ちを受け止め他の子にも伝えていく。 ・飼育小屋の掃除を嫌がっている子には、その必要性に気づかせていきながら、その子にできる仕事を見つけあせらずに見守る。

4 保育実践

(1) 主 題

「小動物と、もっともっと友達になろう！」

(2) 目 標

小動物との体験や感動を友達や教師と伝え合い、共感し合うことで、小動物とのかかわりを一層深めていく。

(3) 設定理由

子どもたちは、小動物が好きでよくかかわって遊んでいる。これまでに様々な体験や感動を味わってきた。その体験や感動を友達や教師と伝え合い、共感し合う中で互いに育ち合い、小動物との豊かなかかわりに自ら気づいていく。また、小動物と直接触れ合う体験を通して小動物に対する親しみを一層深めていく。

このような活動を繰り返していく中で、小動物と共に生活するという子どもの中に育てれば、結果として思いやりの心が育まれていくものと考え、次のような実践をした。

(4) 実践1 「大きな絵本を作ろう！」

① ねらい

- ・小動物に対する思いや考えを絵や言葉で表現し、伝え合うことの楽しさを味わう。
- ・友達の小動物への思いや考えに関心を持ち、豊かなかかわりに気づく。

② 活動内容

- ・グループでひとつの場面の絵や話を作る。
- ・それぞれのグループの場面を綴り、絵本にする。

③ 活動の経過

【きっかけ】

コオロギ描いたよ (10月28日)

「先生見て! コオロギに似ているでしょう」と得意顔。毎日コオロギの姿をよく見ているので、その姿をよくとらえている。

絵本を作ろう (10月30日)

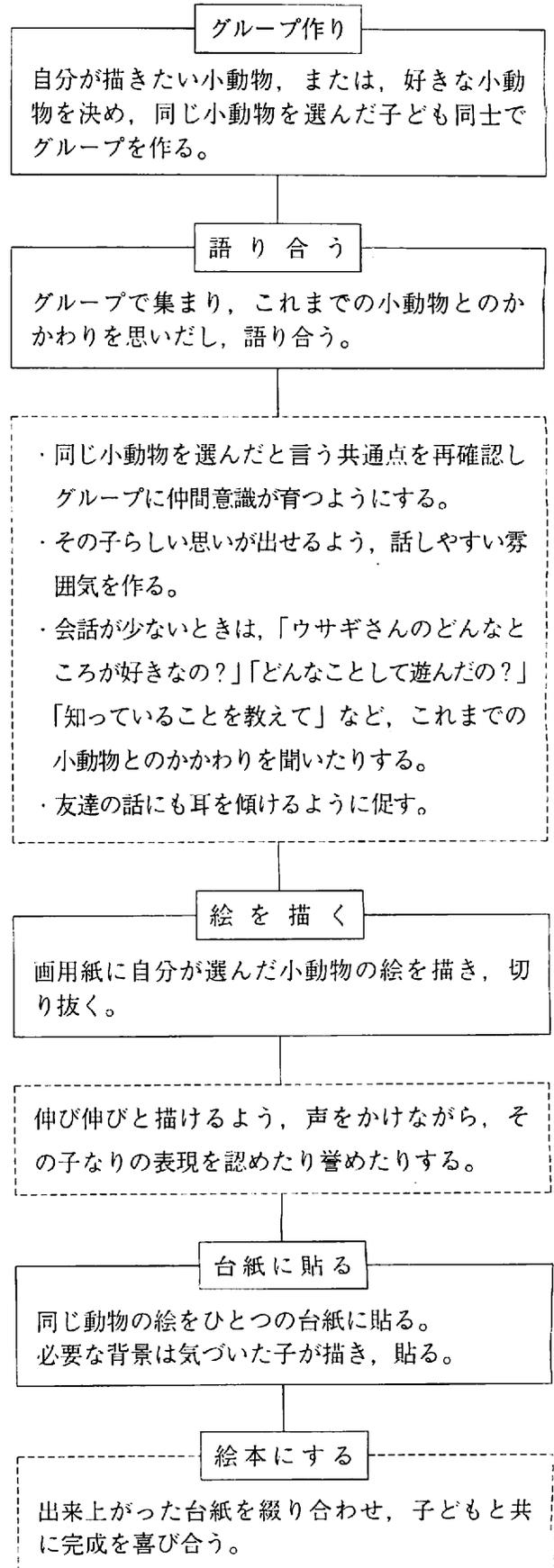
子どもが描いた小動物の絵を切り抜き絵本を作り、教師が創作した話をする。

「僕たちも作りたい。」という声が出る。

【絵本作り】

活動期間・10月31日～11月19日

□ 子どもの活動 □ 教師の援助



④ 活動の結果 大型絵本「牧港動物園」の完成

「各グループの絵本の場面」は

3～4人のグループの子どもたちでひとつの場面を作った。

「絵本の内容」は

グループの友達同士で小動物が好きな理由、小動物と遊んだこと、小動物のことでみんなに教えてあげたいことなどについて、話している場面の言葉を教師がまとめたものである。

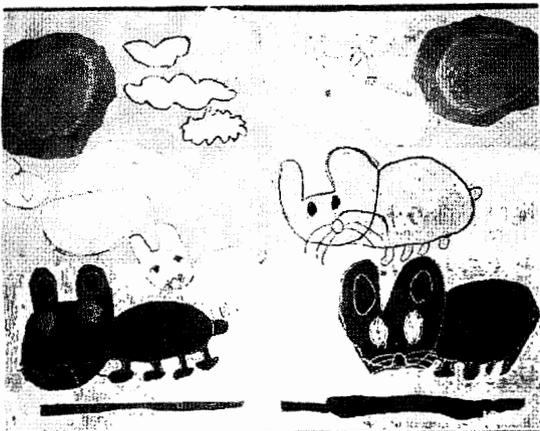
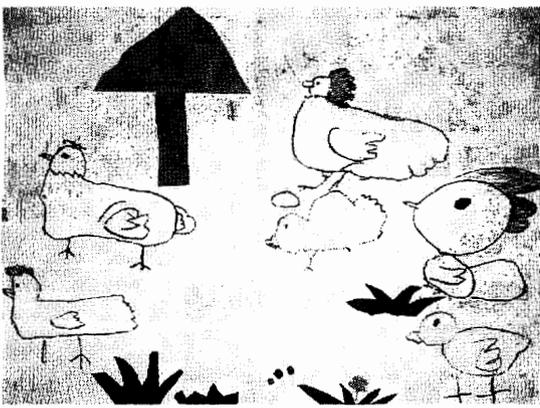
「観点」は

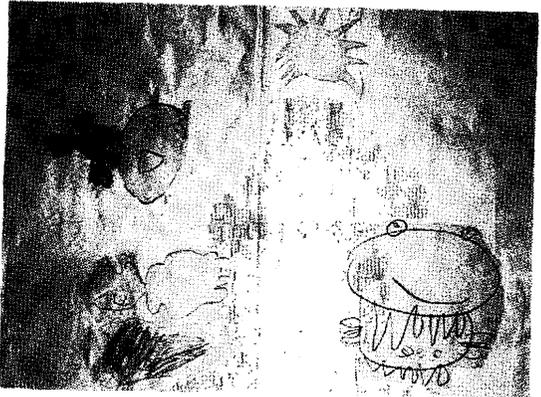
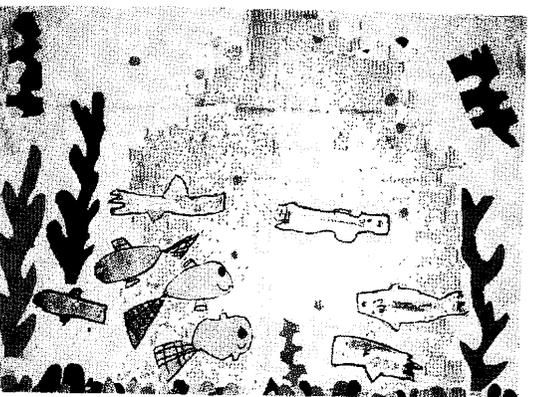
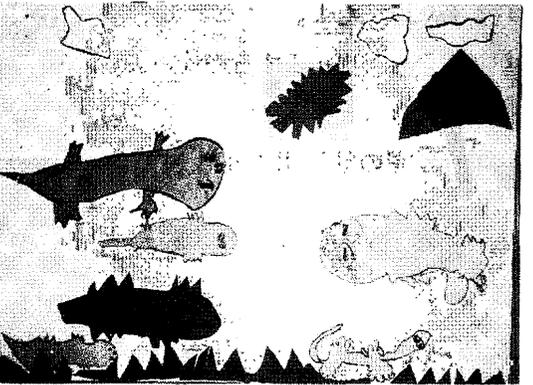
小動物との体験や感動が表現されている、大型絵本の子どもの言葉を図1の『思いやりの心が育つ過程』にそって分類し、その育ちを見る観点とした。

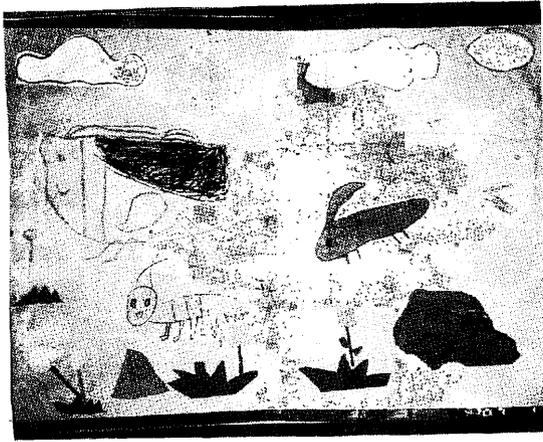
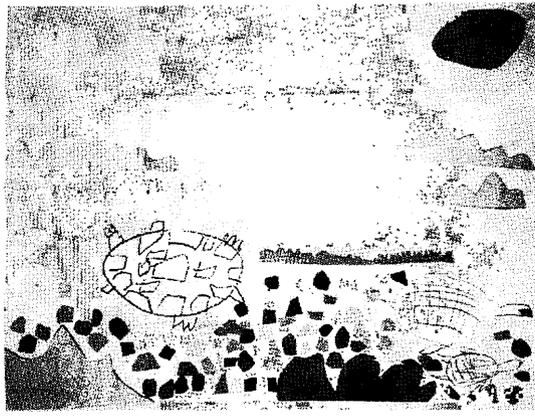
思いやりの心が育つ過程

- A 気持ちの安定 B 関心を持つ C 相手を知ろうとする
D 相手を尊重する E 命の大切さを知る

〈大型絵本 題名「牧港動物園」〉

各グループの絵本の場面	絵本の内容 (話し)	観点
<p>ウサギグループ</p> 	<p>ウサギは、<u>優しいよ</u>。 背中が、<u>さらさら</u>。 体が、<u>柔らかいよ</u>。 <u>ふわふわ</u>している。 抱っこしたら、<u>重たかったよ</u>。 ウサギさんが怒るから、<u>抱っこするの怖いよ</u>。 ニンジンあげたら、<u>きっと喜ぶよ</u>。 ふれあい広場でウサギの幼稚園ごっこして<u>あそぼう</u>。</p>	<p>C B B B C C D D</p>
<p>ヒヨコグループ</p> 	<p>ヒヨコが<u>生まれたよ</u>。 くちばしで<u>卵を割って</u>、出てきたんだね。 抱っこしたいけど、<u>我慢しよう</u>。 もっと、ヒヨコが<u>生まれるかな</u>。 お母さん鶏が、お外で遊んでいたから、<u>もう卵はヒヨコにならないよ</u>。 僕の家にも<u>ヒヨコがいるよ</u>。鶏も猫もインコもいるよ。 大きくなったヒヨコは、<u>抱っこしてもいいんだよ</u>。 お父さん鶏は、<u>すぐ逃げるから抱っこできないよ</u>。 僕が抱っこすると、<u>鶏さんは眠ってしまうよ</u>。 鶏さんは、<u>僕の友達だよ</u>。</p>	<p>C C D B C B D C D D</p>

各グループの絵本の場面	絵本の内容(話し)	観点
<p data-bbox="337 249 525 283">カエルグループ</p> 	<p data-bbox="729 283 1309 691">カエルの口って、<u>おもしろい</u>ね。 ピョンピョン、<u>ジャンプも上手</u>だね。 水の上を泳ぐんだよ。 カエルは、<u>何を食べるのかな</u>。 僕、<u>知ってるよ</u>。<u>べろを長くして、ハエやカを</u> <u>食べるんだよ</u>。 なかなか、<u>餌が見つからなかったよ</u>。 とうとう、<u>カエルは死んでしまった</u>。 カエルさん、<u>ごめんなさい</u>。</p>	<p data-bbox="1340 306 1387 691">C C C C C B C E</p>
<p data-bbox="313 725 533 759">グッピーグループ</p> 	<p data-bbox="721 759 1309 1145">たんぼぼ組から、<u>グッピーをもらってきたよ</u>。 グッピーって、<u>色がきれい</u>だよ。 <u>目もきれい</u>だよ。 体に、<u>黒い点々</u>もあるよ。 手を近づけると、<u>こっちへよってくるよ</u>。 <u>餌がほしい</u>だよ。 口で餌をつぶして<u>食べている</u>だよ。 5匹のグッピーは、<u>元気いっぱい</u>だね。</p>	<p data-bbox="1340 771 1387 1145">B C C C C C C C</p>
<p data-bbox="321 1190 517 1224">トカゲグループ</p> 	<p data-bbox="721 1236 1309 1598">わくわく広場の芋畑の中にトカゲがいるんだよ。 捕まえようとする、<u>ぬるぬるして、はやわぎ</u> で逃げて行った。 しっぽが、<u>切れてしまった</u>。 しっぽが切れても、<u>死なないよ</u>。 また、<u>生えてくるから大丈夫</u>だよ。 トカゲのしっぽって、<u>不思議</u>だな。</p>	<p data-bbox="1340 1236 1387 1598">B C C C C C</p>
<p data-bbox="321 1655 509 1689">アヒルグループ</p> 	<p data-bbox="721 1678 1309 2075">ちよっぴり、<u>怖そう</u>なアヒルさん。 くちばしで、<u>噛み付かれ</u>そうだったよ。 でもね、<u>本当は優しい</u>んだよ。 掃除をしていたら、<u>僕の手</u>にチュウをしたよ。 <u>ありがとう</u>って言ったよ。 <u>欲張りなアヒル</u>もいるよ。<u>餌を独り占め</u>して、 <u>鶏をつつく</u>んだよ。 アヒルさん、<u>意地悪</u>したらいけないよ。 ウサギや鶏と<u>仲良く</u>しようね。</p>	<p data-bbox="1340 1678 1387 2075">B B C D D C D D</p>

各グループの絵本の場面	絵本の内容(話し)	観点
<p data-bbox="319 294 558 340">コオロギグループ</p> 	<p>わくわく広場の溝の近くで、コオロギを見つけたよ。</p> <p>コオロギの鳴き声はきれいだな。</p> <p>顔もかわいいよ。</p> <p>キャベツやキュウリを、おいしそうに食べるよ。</p> <p>赤ちゃんが、生まれたんだよ。</p> <p>赤ちゃんコオロギも、お母さんコオロギと同じ顔してる</p> <p>ちっこくて、数えられないよ。</p> <p>13匹かもしれない。</p> <p>たくさん生まれて、家が狭くなったら、わくわく広場に返してあげよう。</p>	<p>B</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>D</p>
<p data-bbox="351 873 526 918">カメグループ</p> 	<p>カメの名前は、ごんべえだよ。</p> <p>餌をあげると、おいしそうに食べるよ。</p> <p>びっくりすると、甲羅の中に隠れるんだよ。</p> <p>甲羅は、とても堅いんだよ。</p> <p>つめも長いよ。</p> <p>水が汚れていたから、換えてあげたよ。</p> <p>独り暮らしで寂しいね。</p> <p>お友達を見つけてあげる。</p> <p>一緒に遊んであげるよ。</p> <p>ごんべえに、優しくしてあげる。</p> <p>ごんべえは、みんなのお友達だね。</p>	<p>D</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>D</p> <p>D</p> <p>D</p> <p>D</p> <p>D</p> <p>D</p>

完成後の活動

出来上がった絵本をみんなに見せたい、聞いてもらいたいと言う気持ちを持ち、生活発表会に保護者の前で発表した。(12月7日)

子どもの姿

「ドキドキした。」「上手にできたよ。」「楽しかったよ。」など、一人一人がその子なりに頑張り、満足感を持っている様子が見られた。

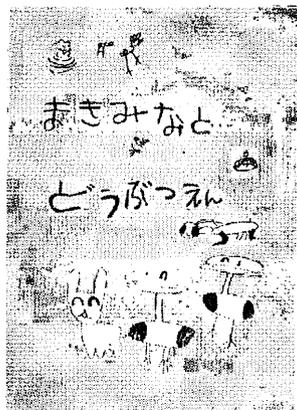


表1 大型絵本の8場面の言葉を「思いやりの心が育つ過程」を観点とし、分類した結果

記号	グループ名 思いやりの心が育つ過程(観点)	人数		うさぎ	ひよこ	かえる	グッピー	トカゲ	アヒル	コオロギ	かめ
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
A	気持ちの安定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B	関心を持つ	3	2	1	1	1	1	1	2	1	0
C	相手を知ろうとする	3	4	6	7	5	2	7	4		
D	相手を尊重する	2	4	1	0	0	4	1	7		
E	命の大切さを知る	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

⑤ 結果と考察

大型絵本の言葉を「思いやりの心が育つ過程」を観点として分類した結果(表1)から次のようなことが分かった。

絵本作りをする子どもの姿から次のようなことが分かった。

- ・小動物の様子を見たり、泣き声を聞いたりして、安心感を持つ過程〔A 気持ちの安定〕の時期は通過したものと思われる。
- ・〔B 関心を持つ〕はウサギグループに多い。友達のかかわる様子に刺激され、最近になってウサギとかかわるようになった子ども達であることが分かった。
- ・ほとんどのグループが〔C 相手を知ろうとする〕が多い。この時期の子どもの思いやりの心の発達は、この過程であると思われる。
- ・カメグループは〔D 相手を尊重する〕が多い。その要因として、身近に飼育している、触れ合っていて遊んでいる、長い期間飼っていることが考えられる。
- ・カエルの死を体験し〔E 命の大切さ〕に気づいている子もいる。

- ・遊びや生活の中で小動物とかかわり、様々な感動や気づき、発見をしていることが分かった。
- ・小動物と身近にかかわり、直接体験を積み重ねてきた事が、生き生きとした絵や言葉となって表現されたと思われる。
- ・絵本作りによって、小動物との体験や感動をクラス全体で共感し合うことができた。
- ・自分の絵や言葉が友達や教師から認められたり、共感し合ったりした事で自分の体験を再確認することができたと思われる。
- ・小動物に対する思いやりのあるかかわりに自ら気づくためには、教師が互いに伝え合える関係や雰囲気心がけていくことが必要であることが分かった。

仮説1の検証

絵本作りを通して、小動物とのかかわりで得た体験や感動を、友達や教師と伝え合い、共感し合うことは、思いやりの心が育つひとつの方法であることが分かった。

(5) 実践2「ふれあい広場で遊ぼう！」

① 実践に当たって

クラス全体での大型絵本作りを通して子どもたちは、友達の話に共感し新たな小動物への興味・関心が高まり、仮説1が検証された。そこで、小動物に対する親しみを一層深め、思いやりの心が育つよう、小動物と直接触れ合える場を設定した。子どもたちに思いやりの心が育つことを願い、小動物とかかわる子どもの姿を『思いやりの心が育つ過程』を基に5つの観点で分析し、一人一人の育ちをとらえ仮説2を検証していく。

② 一人一人の育ちをとらえる

これまでの小動物に対する、興味・関心・かかわり方などから『思いやりの心が育つ過程』をとらえ、その子なりのかかわりを共感的に受け止め、援助していくために表2のように一人一人を把握した。

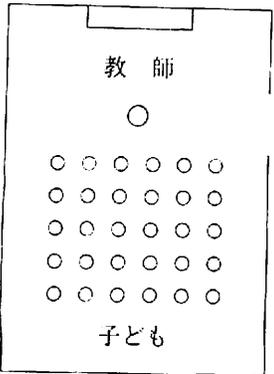
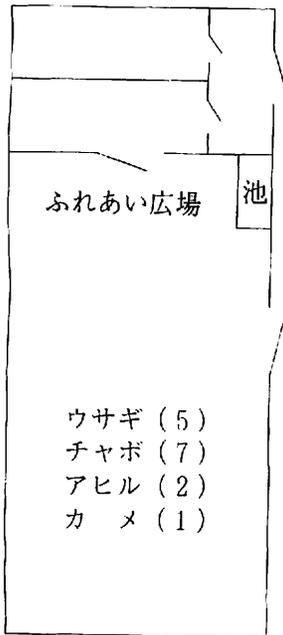
思いやりの心が育つ過程	A 気持ちの安定	B 関心を持つ	C 相手を知ろうとする
	D 相手を尊重する	E 命の大切さを知る	

表2 小動物に対する一人一人の興味・関心・かかわり方と『思いやりの心が育つ過程』

番号 過程	興味・関心・かかわり方	番号 過程	興味・関心・かかわり方
男1 C	2才の頃、小指の先をウサギに噛み付かれたが恐がらずにウサギを抱いている。	男16 C	家庭でいろいろな小動物を飼っている。園では、昆虫に関心を持ってかかわっている。
男2 C	虫のいる場所に詳しく、捕り方が上手なので友達から頼りにされている。	男17 D	飼育小屋の掃除をしたら、アヒルがありがとうって言ったと感動していた。
男3 D	カメの水かえや飼育小屋の掃除を自分から気づいてやる。	男18 C	家でやっとカメを飼うことを許可され、喜んでいる。乱暴な扱いが少なくなった。
男4 C	「牧港幼稚園は動物園みたいだよ」と家族に、よく小動物の話伝えてる。	女1 B	バッタやコオロギなどの昆虫を捕まえることに関心を持っている。
男5 C	ウサギと遊んだ後に描いた、ウサギの体の中に心臓を描いていた。	女2 C	チャボやウサギを気持ち良さそうに、よく抱いている。
男6 D	ウサギをよく抱いて遊んでいる。かかわり方が優しい。	女3 C	仲良しの友達と一緒に毎日のようにウサギを抱いてから、他の遊びを始める。
男7 C	2学期になって、初めてチャボを抱けるようになって喜んでいる。	女4 B	仲良しの友達が動物が好きなので、それに刺激されてかかわるようになった。
男8 B	昆虫をたくさん捕まえることに関心が集中している。	女5 D	小動物への関心が強い。バッタやセミなどを捕った後に元の場所に返してあげる。
男9 D	クラスのカメに「ごんべえ」という名前をつけ、よく水かえをしている。	女6 D	飼育小屋の掃除を喜んでやる。チャボやウサギを抱けるようになって喜んでいる。
男10 A	小動物に対して関心が薄い、誘うと嫌がらずにかかわる。	女7 B	ウサギが好きでよく背中をなでている。抱きたいと思っているが、少し怖がっている。
男11 D	飼育小屋の小動物に特に関心があり、時々降園後も様子を見に来る。	女8 C	ダンゴムシやスズムシを家庭で飼育し、飼育方法を図鑑で調べたりしている。
男12 C	友達に誘われて、時々チャボを抱いて遊んでいる。	女9 C	最近からウサギを抱けるようになり、とても喜んでいる。
男13 B	家から餌を持ってきて、小動物が餌を食べる様子を見て楽しんでいる。	女10 C	仲良しの友達と一緒にウサギを抱いてから、他の遊びへ行く。
男14 E	小動物を乱暴に扱っている友達に優しくするように注意している。	女11 D	動物になりきって遊んでいる。ウサギやチャボによく話しかける。
男15 D	自分が抱くと、チャボが気持ち良く寝てしまおうと言って得意になっている。	女12 C	上手にウサギを抱けるということに自信を持っている。

③ 指導案

指導者 名 嘉 房 枝

日時	平成8年12月10日(火) 9:00~10:00		幼 児 の 姿	<ul style="list-style-type: none"> 先週の発表会で大型絵本「牧港動物園」をクラスで取り組み、満足感を持っている。 グッピー、コオロギ、カメなど室内の小動物に関心を持ち、餌を与えたり、観察したりしている。 さくら組から引き継いだ飼育当番を、楽しみにしている。 小動物と遊んだ後に手を洗う事を忘れがちである。
対象児	あさがお組 30名			
場所	教室→園庭(ふれあい広場)			
ねらい	ふれあい広場の小動物に関心を持ってかわり、一層親しみを持つ。			
内容	<ul style="list-style-type: none"> 小動物に対する思いや考えを伝え合う。 小動物の世話をしたり、遊んだりする。 			
時間	環境の構成	幼児の活動	教師の援助	
9:00	<p>あさがお組の教室</p> <p>黒板</p>  <p>教師</p> <p>子ども</p>	<ul style="list-style-type: none"> 集まる。 「花咲き山」を歌う。 ふれあい広場で何をしたいか考える。 小動物の喜んでいる様子を思い出したり、自分で考えたりする。 絵本の絵を見る。 「しろいうさぎとくろいうさぎ」 	<ul style="list-style-type: none"> トイレに行ったり、使った遊具を元の場所に返したりしてから、集まるように声をかける。 発表会で歌ったうたをみんなで歌い、楽しい雰囲気を作る。 小動物の様子を思い出させ、どのような世話をしたり、何をして遊びたいか投げかける。 小動物に対する一人一人の思いや考えを受け止め、他の子にも伝える。 絵本の中のウサギの表情に関心を持たせる。 	
9:30	<p>飼育小屋</p>  <p>ふれあい広場 池</p> <p>ウサギ(5) チャボ(7) アヒル(2) カメ(1)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 餌をやったり、水を入れ換えたりする仕事をどのグループがするかを相談する。 今日の飼育小屋の当番は掃除に行く。 飼育小屋の掃除をする。 餌を与える。 水を取り換える。 池を掃除する。 かかわって遊ぶ。 動きや表情を見る。 なでる。 抱く。 話しかける。 友達や教師に気づいたことや考えたことを伝える。 ふれあい広場で遊びたい子は引き続き遊ぶ。 砂遊びや運動遊びなどやりたい子はわくわく広場に行って遊ぶ。 発表会で経験したダンスや手裏剣作りをやりたい子は教室に戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> 共に生活している仲間として、世話をすることの必要性に気づかせるようにする。 掃除をした後や遊んだ後は、手を洗うことを忘れないように、絵を見せて確認する。 グループごとに今日の活動を確認しながら、ふれあい広場へ送り出す。 小動物や世話をしあげたことで、小動物が喜んでいることを伝える。 掃除用具を元の場所に返すのを忘れていた子がいたら、気づかせるようにする。 小動物をいたわったり、大切にしている姿をとらえ、回りの子にも伝えていく。 小動物に対して乱暴な扱いをしている子には、動物が嫌がっている様子に気づかせるようにする。 教師も一緒に小動物とかかわって遊びながら、子どものつぶやきにも耳を傾ける。 他の遊びへ行きたい子は薬用セッケンで手を洗うように声をかける。 	
評価	<ul style="list-style-type: none"> 小動物に対しての思いや考えを伝え合い、共感し合っていたか。 小動物に関心を持ってかわり、世話をしたり遊んだりして一層、親しみを持つことができたか。 			



『小動物の世話について』

全体で話し合う場面の言葉

T (教師)「昨日は、ふれあい広場でたくさん遊んだんだよね。」
 C (子ども)「餌をあげたよ。」
 C「白いウサギと黒いウサギがくっついてたよ。」
 C「きれいにお掃除したよ。」
 C「水をきれいにしたよ。」
 T「今日は天気が悪いけど、お掃除はどうしようかな。」
 C「やりたいよ。」
 C「臭いと思ったけど、臭くないと思ったら臭くなかったよ。」
 C「池の水は、今日も僕がきれいにする。」
 T「水換えは昨日やったから、今日はやらなくていい？」
 C「だめだよ。」
 C「毎日換えないと、アヒルが汚い水飲んで病気になるんだよ。」

教師の受け止め

- ・小動物のために頑張ったという充実感を持っている。
- ・世話をすることの大変さを実感しているが、その必要性にも気づいている。

飼育小屋の掃除を嫌がっていたK男の姿

これまでの小動物とのかかわり

- ・家庭でカメを飼っている。
- ・小動物に対する関心が高く、よくかかわっている。時々、乱暴な扱いが見られたが、しだいにやさしくかわるようになってきた。

本時のK男の姿

- ・クラス全体で話し合う場面での発言はなかった。
- ・K男のグループは飼育小屋の掃除の当番である。「僕、きれい好きだから飼育小屋の掃除するのは嫌だなー。」と言いながら外へ出る。
- ・自分から長靴を履き、ホースの準備を始めた。
- ・シャワーの調整がうまくいかないので、A男に教えてもらう。
- ・「臭いなー」と言うA子に「我慢しれー」と励ましている。
- ・ホースの水がA子にかかった。「ごめん」と謝りホースの使い方に気をつけながら続ける。
- ・「A男、あそこもきれいにしよう。」と声をかけ最後まで頑張っていた。

活動後のK男の姿

- ・翌日「昨日、僕が掃除したら、アヒルが首を振ってたよ。きれいになったかなって見てたようだったよ。」と話していた。
- ・その後の飼育小屋の清掃当番にも、A男と一緒に頑張っている姿が見られた。

K男の変容



「掃除するの嫌だなー。」



「シャワーの使い方を教えて！」

【実践2のまとめ】

- ・『思いやりの心が育つ過程』を活用し、子どもの育ちをとらえたことで、一人一人を共感的に受け止めることができ、その変容にも気づくことができた。
- ・その子らしさを発揮して小動物とかかわり、親しみを深め、思いやりの心が育つためには小動物に対する感じ方や思いを的確にとらえようとする教師の姿勢が大切であることが分かった。
- ・直接体験と間接体験を繰り返しながら、小動物の気持ちになって考えたり、大切にしたりする思いやりの気持ちが高まっていくことが分かった。教師は、今一人一人の子どもの中に何が育っているのかを『思いやりの心が育つ過程』を基に考えながら、小動物との体験を深め広げていけるようにする事が必要であることが分かった。

仮説2の検証

『思いやりの心が育つ過程』を基に幼児一人一人の育ちを受け止めることは、思いやりの心が育つための援助のひとつであることが分かった。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

【仮説1について】

小動物との体験や感動を伝え合い、共感し合うことでより豊かなかかわりに気づき、思いやりの心の育ちが見られた。

【仮説2について】

『思いやりの心が育つ過程』をとらえ、幼児一人一人の育ちを受け止めることによって、思いやりの心が育つための援助ができた。

2 今後の課題

- (1) 地域や家庭にいる小動物や自然環境なども、積極的に活用していきたい。
- (2) 小動物に対する思いや考えを伝え合う活動として、紙芝居、ペープサート、パネルシアターなどの活動の展開も工夫していきたい。

おわりに

これまで、目に見えない心の育ちをとらえる事の難しさを痛感させられてきましたが、子どもたちの小さな思いやりの心の芽生えに気づき、感じ取れる教師になりたいと願い研究を進めてきました。

研究期間中、御指導くださいました浦添市教育委員会の比嘉美也子指導主事、宮城久子指導課主査、研究所の田中一郎所長、髙原安哲係長、當間正和指導主事、與那城太一事務主事、宮城陸代・座間味郁代図書館司書に深く感謝申し上げます。

研修の機会を与えてくださいました安谷屋進園長、副園長の鈴木紀子先生、30人の子どもたちを温かく見守り、育んでくださった大城真紀子先生はじめ、職員の皆様の協力のお陰で研究を終えることができました。厚くお礼申し上げます。

《参考文献》

- | | | |
|-------------|-------------|--------|
| 幼稚園教育指導書増補版 | 文部省 | フレーベル館 |
| 保育実践用語辞典 | 西久保礼造 | ぎょうせい |
| 自然保育の原点 | 湯元信夫著 | 学芸図書 |
| 環境 | 山内昭道 | 東京書籍 |
| 保育内容・環境 | 中沢和子・小川博久編著 | 建帛社 |
| 環境 | 吉田敦・鈴木重夫編著 | 福村出版 |
| 環境 | 大場幸夫著 | ひかりのくに |